

戸沢瑞子の「旅日記」(翻刻)

東京桂の会

さかみの國江の島といふ所にはいとくあやにかしこき
おほん神のましますと伝へ聞て はやうよりいとゆかしう
いつしかゆきてをかみ奉らはやと 年月思ひわたりしかと
さまくのことにさへられて やうくことしなん みの
としにもあなれは せひに思ひおこして旅のてうとなと
ことくしうはあらず 万ことそきてかろらかに出たつ頃
はさつき中の一日也 雨かちなる頃なれとさもあらて 空
晴やかにして ことしは例よりも暑さおくれたれば 朝風
いと涼しう行 程なく袖か浦に行かゝりぬ

立出る旅の衣のうすければいと涼しき袖かうらかせ
とし月思ひわたりしほいかなひて いとくうれし 此ほ
とりは里のなりはひ所近くていはけなき頃より しはしめ
なれにしあたりなれと けふはあらたにおもひなされて
いくそたひきつゝなれにし道なれとくらめつらしき旅
の衣手

なと思ひつゝ行々て 品川の宿に至りぬ こゝにてわりこ
とうてさせなとしつゝ しはしやすらひて送りこし人々に

はににるへうもあらず 是にてこそ青うなはらといひつゝ
う思はるれ まことにさらしな日記にいはれたるこひちの
様にはあらずなむおほえし

和田の原見るめにあかぬこゝちして打過かたき波のけ
はひか

千舟もふねもこゝかしこに見えていと興あり けにかへ
るさも忘ぬへきたひの心やり也 さはれ行先いそくものか
らやを行々てさるの時過る頃 かな川のうまやにつきに
けり こよひはこゝに宿もとめて 十二日つとめて立いて
たり 明はてぬ程なりけれ のもやとかいふもの秋の霧に
もおとらすいとふかし 分つゝ過るまゝに海のおもてはほ
のくとあけに線々に絵とりたることくにして朝日さし出
たるうれしさとへなし 見るか内に晴てまはゆき日の光
波にかゝやくけはひ えもいはすをかし 朝すゝみの程な
れは しはしかちより行に 道すから右には幾千より年は
へにけんとおほしき松の幾ちもとゝなくおしなみて 左は
田つらひろう早苗うゝる時近しとや 賤のか馬引つれて
おり立ありくなと いとをかしうそ目とまる はるかへた
てゝ海辺も見ゆ 万目なれねはめつらしう いつちもく
かへり見かちなむ さはいへ ならはぬかり寝によへは
暁かけていも寝さりければ いとねふう成て のり物に入
てしはしまとろむともなき夢の間に いつしか戸つかの駅

わかれをつくるに さすかに何となく故郷のこと思ひ出ら
れぬにしもあらて

行てかつ帰る身ながら白波のたちわかるゝはさすかな
りけり

まことやきのふかも 里の妹のまたをさなきかもとより
わたつ海の見るめ尽せすおもふとも忘なはとそ故郷の空
とかたなりなからかきておこせ給ひしか いとらうたう思
ひ出て 其折は旅のいそきにまきはされてかへりことた
にえせさりしを いかにさうくしうも思ひ給けんと い
とをしう思へと今更せんすへなしや かくて行程に涙はし
といふを渡り 鈴か森に出ぬ その処はあしき人のつみに
をこなるゝ所とおもへはけおそろしう されといさゝかの
けからひもなくてこゝろおるぬ 大森てふ村は麦わらもて
つくれるさまくのものとあれと 所のさまいとひなひ
て見所なし しはしるこひて六郷といふわたりに舟をうか
へてむかひのきしに至る ひるやすみしてなまむきといへ
る所に行かゝりぬ こゝはゐなかなたれと さる方にをか
しう麦の青葉茂り相て 穂なみうるはしうおし立たり け
にも所の名にはたかはさなりと思ふもをかし 行々て神奈
川ちかく来まゝに 海の面見え渡てそのけはひ今様の絵に
似たり 空はいよく 晴わたり波の色さをにみえて ある
を流せるかとまてになん清う見ゆる 今まで見てし海辺に

に到る 此処は目しひたる女の数多ある所にや 打つれつ
とひてさみせんといふものたつさへこゝかしこありき 人
の家にも来居杯して ふつゝかなるいやしきこゑしてはや
りかにうたふこゑよりはしめて おもやうよになくをかし
人々立とゝまりて皆笑へり 是におとろかされてねふたさ
も忘にけり されと何か心のとまらむや 昼休してやかて
立出たり 藤沢近きほとりにさかひきとかいへる所にてし
はしるこひぬ その家はさゝやかなれと さる方にやうい
せる宿なれば 見くるしうはたあらで 海はこれよりもよ
く見えてをかし 藤沢の名たゝるゆきやう寺にも立寄 た
ふとき物杯さまくををみて日たけぬ程にと急ぐ程に い
さゝか雲立出つ 今までまはゆかりしひの影かくろへ行は
暑さ忘てゆくほとに ほそやかなる川あり 鮎なともあそ
ひていと水清う かちより渡らんにもあらならん浅瀬なれ
と ふなはし打わたしてむかひにわたりて ちひさき家の
せうきと云物に例ののり物なからにやすらひ 供なる人々
に 湯たうへさせなとせるうち 雲はいよく かさなりて
風さと吹出たり すさなるものゝいへらく ようせすは今
たゝ今雨や降くへし 神や音つれ来ぬらん さらぬ程にと
いそかれて心あはたしく あせ道ほそ道よきりて やう
く島に入なんと思ふ頃風はげしう成て おとろくしき
水の音聞ゆ 瀧の流かと思ひしか 近く成て聞は打よする

波の音也けり ことかたには様かはりて左より右より 打
 よする波の白く黒く見ゆるか めなれぬ心にはすこうおほ
 えて 今少し高う立なは ひかれもやせん こゝによりや
 くるかと思ひて安きこゝろもなう 此嶋にまします御神は
 いふもさら也 万の神仏を念しつゝ心もそらにて なるか
 みの音もいさゝかましりたりければいとゝおそろしう成て
 なほきやうよみてゆく程に やすらかに心さす所につき
 にけり 後に人のかたるを聞に 風あひあらき折は波打あ
 はせて ゆきゝの道も絶ぬる時も有となむ けふはさまて
 はなくて 道もいと広らかなりしをあらぬしらぬことなか
 ら 余りに物おちせしをこ也し やとりし所は下の宮の
 へたうなる僧の坊也 あるしはをこなひすとて山こもりせ
 しほとなりけれと 兼てあないし置つれば侍ふをのこあ
 るしまうけ似なうして又なうかしつきたり 万たくひてそ
 思ひける 家つくりことくしうはあらねはおくまりてい
 としつか也 湯あみなとせし程に さと降来たる雨に か
 みのおとも増りて稲つまの光波にきらつきて物すこく さ
 はれかしこき神の宮ゐちかきに心ゆるひて常の物おちには
 似す つよう思ひおこしてそ念しをる かくて一しきりに
 して空晴雨風も神もしつまりければ 今そこゝろまことに
 おちゐて こゝかしこ見わたせば 処のけはひいふもおろ
 かにて 地引とかいひて海人のすなとる杯がよく見ゆ 夕

になれは月涼しう波にはえあるゝ影またなう興あり よひ
 過るまでめかれせて 猶あくるもしらすかほに めて明さ
 まほしけれと あすはまたきに宮にまうてんとて寝にけり
 よへのつかれにこよひはいきたなきまてになむ 又のあ
 したね覚に聞はあさりすとてか 海士とものあちこちのふ
 るこゑく波にまきれす聞ゆ かゝる所にしほしみてから
 き月日をへぬるはいか計物うくも有ぬらん されと又かう
 やうの所にすまひせるも心やりなめりなと さまゝくに思
 ひやられたり さてけふの道は山坂ながら遠からねはかち
 にてそ行 さはいへ ふみもならはぬ身にしあれば やう
 くくに人にたすけられて三つの宮ゐにまうてたりけり 先
 はしめにはしもの宮に参て をかみ終て山におりて こ高
 き方をあふき見ればしめゆひし かはつの大きなるか石も
 てつくれるかあり いかなる故とふに こはむかしより
 此宮のかたへの池に有て 行来の人をなやませしかは ふ
 んしてかくはのほせたととなむ里人申き かたへの山に行
 て見れば さゝやかなる家おしなへて遠めかねてふ物出し
 置て 遠つ海山のけはひを 行かふ人に見すとて女あるし
 なるへし なれかほにあないひて見するを いさゝかの
 そきつるか むかひは七里か浜 かしこはこゆるきの磯杯
 とて名にしおふ所のけはひ杯とききかす也 手にとる計見
 えわたされて見るめこよなう面しろし 汐の干潟なりけれ

は名もしれぬ岩杯さへよく顛れて見ゆ ちかきあたりは目
 かね打置て見るか かへりてをかしういはん方なし

よにたくひあら磯波の音たてゝよせてはかへるけはひ
 かなしも

けにさとうちかけてはさとくたけ 岩に乱るゝ波のありさ
 まは いかなるゑしと云とも筆かきり有てえもおよふまし
 う まいてたくはぬ心にはいひおほすへき言のはもあらす
 なむ とし月音にきゝこし所なれと かく迄はあらしとそ
 思ひし はや道すからなこ思ひし海辺のけはひは何にも
 あらず思ひありぬ それより上の宮 岩もとの宮とをぬか
 つき廻りて 例の人々にたすけられて岩のかげ道ふみわけ
 て見わたせば まないた岩なといひて さまゝくそはたつ
 岩根いとちたし ちこか淵と云は殊に波の音はけしく
 こゝにて身をなければ片ときの間もえたふましう おそろ
 しう むかしの物語も哀におほえて しはくたゝすみて
 それより岩屋へと心さしけり 兼てはおそろしう思ひやり
 て こゝなからとこそ思ひしか けふは干潟にて波かせい
 としつかなれば ことなることもあらしと思ひおこして
 やをら入て見るに 大きな御すかたなるいとうるは
 しき神女ましませり そこにてもぬかつきて猶行ほとに
 さゝやかなる橋あり むみやうのはしといふは是なめりか
 し 松もともさねはそを渡るほとはをくらくして 道もた

とくしう かしらには露すこし落ちり杯して物うし さ
 れと何かはとて

旅衣ぬるともさらにいとほめや神の恵のかゝる雪を

なと つよう思ひてなほ奥ゆかしう 行々はいつしか左み
 きにみあかしあまたもしたれはいと明らかに 思ひの
 ほかにやすらく おくのゑんまてまうてたるは 殊に神
 の御たすけとたふとくなむ 岩のうちにはさまゝくの仏達
 もおはします おほなく念しつゝ 又もとの道をかへり
 てそとに出て打見れば 名たゝる富士の山 手にとる計
 に見ゆ こしをれたる歌もよまゝほしけれとけおとされて
 出こす しはしるこひて蟹のいとなみを見るに さばかり
 はけしき波の中をこゝもせてくゝりつかつきつ かき分
 て鮑とるなといとめつらし めかるへうもあらねと とに
 かくに名残は尽ぬわさなれば 例のかへり見のみせられむ
 かとそゝのかされて立帰るに はしめにならぬ岩山こえ
 て来しかは いとたへかたきまでこうしはてゝ のり物に
 打乗て もとこし道はよきりてほそ道にかゝりてかへりけ
 り その夕つかた浜辺に出て地引とかいへるをちかくて見
 はやと思ひしかと 又俄に空かきくらく神なりとよめき
 瀧なすかこと降くる雨に 旅人はあはてまとひあ引する蟹
 さへ立さわくけはひよく見えて をかしうもいとをしうも
 おもひて

あま衣なれてもかゝる夕立にぬるゝかきすかいとふと
 を見る

旅の衣はまいてと思ひやられたり とかくするうち故郷よりせうくてあり 今の雨にぬれてそきつるあはれさと又うれしさと限りなう思はれて うしろめたう思ひやる 別のたよりなれば万打置ておしひらき見るに いと平らかなるさまに心落ゐたり 程もあらず雨もやみ神音もなく成し比 をかしき物の音してつとひくるものあり こは故郷の町々より百味かうとかいひて いろいろのくた物奉るかにこたひあらたにさゝけ物すとかいひて 参し人々にさまゝなるねを打あはせて ことさへしからのよそひに出たちて そこはかとなくさうそきて をとりありく也けりこゝにも呼入てをすのひまより見るにいとをかしう興ありかくて空はいよく晴にければかの地引 ゆかしう思ひしか 雨のなこり道あしければかたへの女 歌はかりかはるゝ出しやりて 我はこゝなからはしに出て見やりたるか後に思へはこれのみくやしう心残也 暮近き比は琴の師なるほうし きのふつきたりとてあないこひて入来れり 故郷のこと 旅のことかたりあひ括しつゝ打つけなれとこしの物ひとつとこひてひかせけるに 神に奉る心地なりとて よくうけ引てすらゝかきならしたるか もとよりの上手なれば手のかきりつくすといふにあらても いさゝか

とあれたり 日蓮のけさかけ松も年ふりて かたえ枯おち見るかけなし 星の井といふもむかしは影の見えけれど故ありて今は見えすとなむ されはのそきても見さりしかと心には哀にて

いにしへの影も残らぬ星のゐになみたのみこそさしく
 まれけれ

此井は後の世安き人ならては星の影見えすとある人かたりしか さにはあらずとなむ あないしれる者申き その故よしもくはしう聞つれと ひかおほえましりぬらんかとてこゝにかゝす 極泉寺といふ古寺あり そのほとりは村の名をさへしりいへるよし 後の世にはたのもしき所の名なれと 此世にしてはいとくるしき山路也とて 人々詫あへり かくいひたてゝはすへてあしきに似たるさまなれとむかし忍はれて いとゝ哀なる里のありさま也 景まさの手たま石とて五六寸あまりも有ぬらんかいとおもけ也 そをかるゝと手すさひけんますらをの力いか計有けん 此社はその人を神にいはひたるとなむ こもりくのはつせ寺には いとたけ高き観世音おはします みあかし引あけてやうゝに御おもてはをかまれけり みこしか崎といへるところには大きなみ仏おはします ぬかつきて御腹の中にも入ていろゝの仏達をかみて とかくするほとに午のときかかく成にければ しはし昼休して それより由井か

のかいにてにさへ人のみゝをおとろかし 青梅波のねは波にかよひていとゝ限なうおもしろう聞ゆ まことに所からにや 見る物きく物に付ても ひとつとして心ゆかぬはなきそ 中々なる物思ひになん 十四日はかまくらにおもむくとして出たゝんとしても心残りて

なみならずなこりをそおもふかへりては又立よらむこ
 とのかたさに

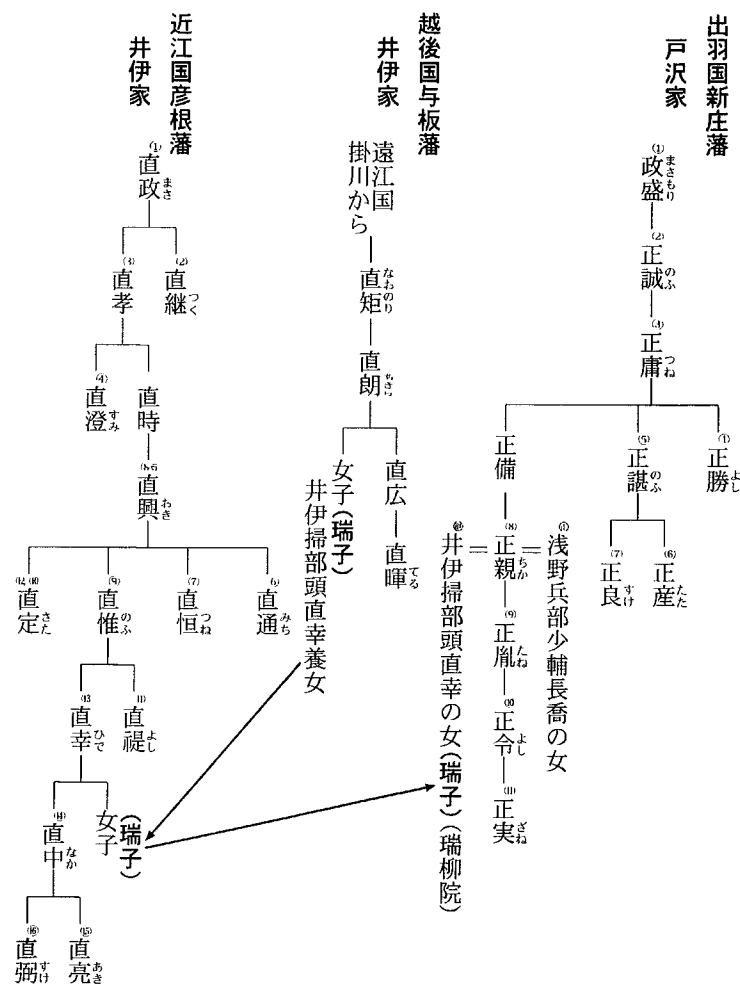
ひく夕に身をまかすともこゝにしていのちつくさんこ
 とをしそ思へ

ともさも成かたくて かへり見かちにて立出けり 浜辺つたひにいろゝの貝をひろひて

家つとにひろふも尽ぬうつせ貝むなしくたゝにかへる
 へきかは

とて たれもゝ手毎にひろひ紙に包 あるは袋やうの物に入なとして 行ともなしに袖かうらにそつきにける そのほとりの小家に家としとおほしく いそちはかりなるおむなのよく物いふか かま倉のあないいとよくしりて 詞たみてもあらずとききかす しはしやすらひて 聞ながら沖をはるかに打見れば 此あたりは波いく重にも立 かせにつれては高らかにのほりて屏風をひろけたるさまに似たり 今まで見しには又やうかへて見ゆ かまぐらの里には名たる古きあとおほくありて見所あれと 名のみにしてい

浜なる貝ひろひなとして時うつるまであくよなう からうして光明寺に行つ 此寺はいと広らかにて堂のさま杯大方奈良す都にもをさゝおとるまじう作たり 此ほとりにむかし里のとのにつかへて みつからもをさなかりし程よりなれむつひせし律阿といひしおもとの故郷にして 身まかりけるか墓を尋て香花など手向させたり こゝにてもさまゝ思ひ出る事多く とにかくに付てむかししのはるゝ所にはありたりけり 名にしおふ鶴か岡八はたの宮は 此春の火のさわきにやけうせて 坂の上には板もてゆきゝゝをとゝめたれば 石すゑをたにも見す よそにをかみて未々の社 あるは堂などのみを見めぐりて名たゝる物とも見てかへりし 松か岡の尼寺にも立寄てけるか 門よりしてはをのこはかたくいましめたれば 女とち忍ひて入つるか 中もんはよくかためたればすへなくて 堂にまします観世音のみをかみて立出たり けんてう寺そのほか名たる所古き跡こゝかしこ見廻りつれと おほえぬ事もおほければことゝにはかゝす 残ゆかしき所々も有つれと とてもかくても此里はくまなく見はてんには ひと日ふつかにてはたるへうもあらねは 大かたにして立出ぬ よりとも公の御屋かた杯も たゝ田はたとのみ成はてゝ むかしものゝふには似つかはしうもあらぬ あやしき賤のをの行かひする杯哀に見つゝ 朝ひなの切通しといふにかゝりて



瑞子の系図

むつかしき岩のはさまを一里あまりも行 わひしきこゝにてそ旅はうき物とはしめて思ひしられる それより過ても猶あせ道ほそみちたたくしう かるうして金さばにつきにけり 此所は六浦ともいふなり 東屋といふ家にやすらひていきつきて やうく心なくさめたり こゝは入江にして波の立るもいとなやかなり 名にしおふ八つのけはひもこゝにこもりて 其ほか名ある岩木とも見えてまことに山水の心をしめてすみなせり宿にして 今やうにみやひたり されと打あはぬこともあまたあれと 所のさまにつみゆるされてたらはぬとも思ひなさす 興ありておほゆ 近ういけすと云物をさへし置たれば 魚の心地よけに遊ぶもめつらしう うさもつらさもはるけたり 昼は忍ひて小舟に打乗 そこはかとなくこき廻りして見ればえほうし島 さる嶋 すゝめか浦などゝてそのほかにもことなるかたちの岩などあり 名たゝるふしもたゝこゝもとに見えたり 夏島といふあり その所は冬も雪のつもらさなりと聞て

雪きえぬ富士のしらねもある中に夏をつねなる島の見ゆらん

干潟においてさまゝの海つ物ひろひ

旅衣はるくきつるかひありて心ゆくまで嶋めぐりせり

よにめつらしうかくてあそひ 夜は月をもてあそひて

えもいはすすゝしきもの哉白波のかゝる所のつきのかけかも

心ある人に見せまほしきあたり也 ふた夜といふをこの所にて明せり 十六日の暁に立出てわつか坂をのほれば能見堂也 かの名たる八のけしき一目に見おろして筆すて松何くれと松もいろく見ゆ 富士はたゝ目のまへに見ゆ こゝにても歌もよまゝほしけりつれと むかしのいみじき絵したに筆をすてたりときくあたりなれは いひけかさむも中々なれば打おきぬ 遠めかねと云物して こゝのへたうに故よしをいはせて そこはかとなく見わたせば 安房上総あるは三つらの二子山杯さへ近う見ゆ それより後は例の物うき山道にかゝりて あせ道杯のほそき所をからうして過て もとのかな川のやとりに帰けり その後はさせるすさひもあらさりければこゝにもらしぬ 明れはふるさとに帰入らんの心いそきに さはいへいと嬉しう 朝とくまたほのくらきに宿を出しかは すこし有て日の影見えたり 朝やけとかいひて 海はたゝおしなへてあけに染たるかとし こはようせすは雨に成ぬへし と人々いひしか露たかはて しはしありてくもるとみえしか程もなく雨降出たり されとかはかりのそほふる雨にはかへりてすゝしう心地よくて我家にこそかへりたりけれ

されとおのつかさしのそく人あらんかとつゝまじうなむ筆詞もつたなくして殊にかろくしきまでのはしたなきゑひありきをや

戸沢瑞子の「旅日記」について

大井 多津子

「東京桂の会」で桂文庫主宰者柴桂子が蒐集した旅日記の中から戸沢瑞子の「旅日記」を読み、翻刻した。

著者戸沢瑞子は、出羽国新庄藩第八代藩主戸沢上総介正親の継室である。

瑞子は『寛政重修諸家譜』によると

越後国与板藩第六代藩主井伊兵部少輔直朗が女。近江国彦根藩第十代藩主井伊直幸に養われ、酒井千熊某に嫁を約し、いまだゆかずして千熊某卒するにより、松平敏丸頼慎に再嫁を約し、故ありて離婚し、正親の室となる。

とある。彦根藩第十四代藩主井伊掃部頭直中の妹で、第十六代井伊掃部頭直弼（大老）の叔母にあたる人である。

『女流著作解題』では瑞子の没年は 天保七年（一八三六）八月二十二日享年六十八歳となつてゐる。逆算すると明和六年（一七六九）生まれとなるが、『国書人名辞典』その他では明和二年（一七六五）生まれ、七十二歳没となつてゐる。ここでは明和二年生まれで考察したい。

瑞子が新庄藩藩主正親と結婚したのは寛政四年（一七九二）で正親三十六歳、瑞子二十八歳の時である。正親は四年後寛政八年（一七九六）に四十歳で亡くなった。瑞子は三十二歳の時であり、五年に満たぬ結婚生活であつた。

正親は天明六年（一七八六）三十歳で新庄藩藩主になる。東北地方では天明三・四年には大飢饉があり、同四年には新庄の大火があつた。その後遺症はあつたであろうが、正親の十年の治世は比較的平穩だったようである。次の第九代正胤の治世は四十四年間に及ぶ。

瑞子五十七歳の時文政四年（一八二二）に江の島・鎌倉の寺社に詣でている。江戸時代には江島弁財天への信仰が集まり江の島詣の人々で大変な賑わいを見せた、と江島神社の由緒書に書かれている。その時の「旅日記」が東京桂の会で翻刻したものである。瑞子はこの「旅日記」の他、国書人名辞典によると『瑞子君文集』『瑞子君歌集』があるようだが、国立文学研究資料館には『戸沢侯夫人文集』として所蔵されている。

瑞子の旅日記について

文政四年（一八二二）五月十一日に白金の新庄藩中屋敷を出立、十七日に帰宅している。七日間の旅であるが、當時としてはやはり大変な事だったであろう。「旅のてうと

なと ことくしうはあらず 万ことそきてかららかに出立つ」旅の品々は仰々しくしないで身軽に出立つとある。当時の旅行携行品の細工は精巧にできていて、驚くほど小さくなるものが多い。瑞子はどのような品を懐に入れていたのであろうか。

歌は十四首と少ないようであるが行く先々の景色など見聞きしたものや自分の思いや疑問を率直に質問し、それを丹念に書とめている。原文を読んでいるときも風景や心の動きがよくわかり、ともに楽しく紙上の旅ができる。

品川で見送る人々と別れる時は

行てかつ帰る身ながら白波のたちわかるゝはさずかなりけり

と詠み、心のゆれうごくさまを歌にしている。涙橋を渡る。涙橋とは立合川にかかる橋で、刑場に向う罪人と家族が涙ながらに別れを告げた橋で、碑が建っている。鈴が森を通る時は処刑場と知っていて、気味の悪い所と思っていたのであるうが、「いさゝかのけからひもなくてこころおいぬ」少しの穢れもなくと記している。現在は東京都の旧跡に指定されている。

戸塚の宿では三味線をひき、あちらこちらと調子にのつてうたいながら歩く盲目の女たちの顔つきがおかしく、それを見ている人々は皆立どまり笑っていると記している。

藤沢を過ぎ、遊行寺にも詣で、なお行けば「ほそやかな川あり 鮎などもあそひていと水清う 歩行より渡らん浅瀬なれと 舟橋打渡してあり 向うに渡り」とあるが、鮎が泳いでいる川は歩行では無理かと思うが、輿に乗ったまま舟橋を渡った様子が描かれ興味深い。

江の島へ入る時は雷の迎えを受け、従者の言葉や雷の恐ろしさを書とめている。海辺の雷はものすごく今も変わりが無い。翌日はあま達の声に目覚め、彼等の生活をさまざまに思いやつている。江の島は山坂があるが、歩行で、下宮（現辺津宮）上宮（現中津宮）岩本院、稚児ヶ淵、奥の院（現奥津宮）までも順拝する。その間にまた夕立にあう。俄に空が曇り雷がなり、瀧のような雨が降る。旅人のあわてふためくさま、あま達の立さわぐ様子を記している。

あま衣なれてもかゝる夕立にぬるゝかさすかいとふと
そ見る

小高い所から遠めがねで七里が浜や小動の浜などの海山を見わたし、「近きあたりは目がね打置き見るが かへりてをかしういはんかたなし」近くは遠めがねを置いてみる様子は目に浮かぶようである。今は江の島にはエスカーというエスカレーターができて登りは随分楽になった。二日程江の島に滞在し、常の生活では体験できないことばかりであつたであろう。

なみならずなこりをそおもふかへりては又立よらむことのかたさに

と詠み、江の島に名残を惜しみながら鎌倉に向う。江の島から七里ヶ浜の磯づたいに土産にする貝を拾いながら稲村ヶ崎へ行く。「たれもくも手毎にひろひ紙に包あるは袋やうの物にいれ」たれもくとは、侍女たちと思われるが、紙に包む人、袋のようなものに入れる人あり、ほほえましい光景である。

家つとにひろふも尽ぬうつせ貝むなしくたゝにかへるへきかな

稲村ヶ崎から極楽寺、御霊神社、長谷寺から由比が浜に出、光明寺、鶴岡八幡宮へ行く。

この年、文政四年（一八二一）一月十七日に鎌倉で大火があり、雪の下村から山村三里延焼し、鶴岡八幡宮も類焼した。火事から四ヶ月後の焼け跡の有様が記されている。

『武江年表』には同じ一月十七日に品川宿も火事があり、品川宿が残らず焼けたとある。品川宿は瑞子たちが通った五月には、旅人にはわからない程に復興していたのであるうか。品川宿で見送りの人々と別れた時に、里の幼い妹からの歌を思い出したが、宿の火事の事は何も記されていない。

鎌倉から朝比奈切通しを通り金沢八景へ行く。朝比奈切

通し（国史跡）は今も古道の面影を残している。能見堂から金沢八景を見おろし、又遠めがねで房総半島、三浦半島を見渡している。能見堂は現存しないが地名で残っている。平安の昔に絵師巨瀬金岡が金沢の絶景に感嘆するのみで筆を捨てたという伝説の地である。瑞子たち一行が泊まった東屋は、明治十九年（一八八六）伊藤博文らが明治憲法を起草した旅館で、草案の入った鞆を盗まれたため、翌年夏島の伊藤の別荘に場所を移して草案を完成させたという宿であろう。今は碑があるだけである。鎌倉は見所も多く、一日二日ではとても見きれないと書かれているが、それは今日でも同じである。

十七日の朝ほの暗い時に宿を出た。朝焼けで海が朱に染まっていた。人々は雨になると言い合っているうち降り出したが、そぼ降る雨はかえって涼しく、心地よく帰宅したと記している。

祖母瑞子と孫正令について

新庄藩第十代藩主正令を研究された福井久蔵氏の著書『戸沢正令侯と其著書』から孫から見た瑞子の像を浮かびあがらせてみたい。正令は文化十年（一八一三）に生まれた。瑞子四十九歳の時である。そして二十四歳の時に祖母瑞子が七十二歳で没した。正令は天保十一年（一八四〇）

二十八歳の時第十代藩主となる。翌天保十二年（一八四一）瑞子の七回忌に瑞子の歌集『月の波』を出した。歌集の序は正令が書いている。

『月の波の詞の序』より

わがおば、君は男の子魂おはしけるまゝに 大御国の古学をむねとせられて、うたもはた古風中昔風までをこのまれて、後の世風は心とせず。長うた短うた文など数おほかりき。いときなき頃は林諸鳥のをしへをうけられて名を瑞子とおほせけりとぞ。諸鳥世をさりし後は羽倉の民子にことゝひさだめられぬるを、民子も身まかりし後は三島自寛にまなばせられたり。諸鳥はあがたゐのをしへ子にて学のかたも

（中略）

瑞子のうい学びの師は林諸鳥だったようである。諸鳥は本姓、塩瀬。江戸霊岸島で菓子屋を営む一方、荷田在満の門人となり国学、和歌を学び、在満・蒼生子らの集まりで詠歌を残した。荷田在満は荷田春満の弟羽倉高惟の息で、荷田春満の養子になり、春満から主に歌学・有職故実を修めた。羽倉の民子とは荷田蒼生子のことである。蒼生子は荷田春満の弟、羽倉高惟の女で春満の養女になり、在満の妹である。諸鳥の縁からであろう、瑞子は蒼生子に歌を学んだ。瑞子二十二歳の時蒼生子は六十五歳で没した。蒼生子が亡くなってからは三島自寛につき国学を修めた。自寛

は將軍家の呉服御用商人で、賀茂真淵の門人である。自寛は瑞子四十八歳の時八十六歳で没している。その後は一まわり程若い村田多勢子を近づけ、文雅を楽しんだようである。多勢子は江戸の儒者渡辺荒陽の女で、村田春海の養女である。渡辺荒陽は武蔵大袋村恩間（現川越市大袋）の名主直宣の息で、江戸に出て町儒者として和塾を営んだが、のち、越後高田藩の儒者として仕えた人である。多勢子は諸侯の奥向きに召されて和歌を教えた。

正令は十歳頃から漢学漢詩作を学び、十三歳頃から和歌を詠み、瑞子に添削を請い、古今集の講義を受けている。十五歳からは村田多勢子に和歌を学んだ。瑞子の住む白金の中屋敷では歌の会も催されたようで、青年正令も出席している。

天保二年（一八三一）、渋谷森元町に新庄藩下屋敷の新殿が成った時に瑞子は正令に寿歌を送り、正令は四首の歌を詠じている。事あるごとに行き来があったようで、村田多勢子の歌会にも出席している。この年、正令は歌集『かつらのや集』第一集をまとめた。

正令の年譜には天保四年（一八三三）に「祖母君剃髪せらる、花の枝に歌をつけて奉る」とあり、瑞子六十九歳の時である。天保七年（一八三六）八月二十二日逝去。瑞柳院と諡す。七十二歳であった。

『月の波の詞の序』より

(中略) さて歌文の集ども自寛が撰みたるが有を、とくより板にゑらせ世に残すべくおもふたまへられなから、なにくれとかゝづらひておくりぬるほどに、ことしのは月廿二日はやう七回の忌にあたりぬれば、今更のやうにおぼえて世におはせしをりの御いづくしみのほなど思ひ出る事いとおほかり。おのれ今かく愚ながら一ひらの文つくるも又こしをれうたひねり出るも、古の考など書出るも其はしだてはおぼ君のねもころにすゝめて道引かれぬるより志をもおこしたるなれば、其御かげのほどのいとゞおもひ出られぬ 後略かういふは天保といふ年の十とせあまり二年さ月

うま子の能登守正令

正令は二年後の天保十四年(一八四三)に三十一歳で没した。正令は急進的、理想主義的政治家であつたが、藩主としては四年間という短命のため、その業績はみることはできなかったが、国学者として文学者として数々の著書を残して、文人大名として著名である。祖母瑞柳院が孫正令侯に与えた影響は、はかりしれないものがあつたと思う。

〔参考文献〕

- 福井久蔵著 『戸沢正令侯と其著作』 厚生閣 一九三八年
『新庄市史』 国書刊行会 一九八一年
『国書人名事典』 岩波書店 一九九三年
『藩史大事典』 雄山閣 一九九〇年
『寛政重修諸家譜』 群書類従完成会 一九六六年
『和歌大辞典』 明治書院 一九八六年
『武江年表』 平凡社 一九七五年
『女流著作解題』 女子学習院 一九三九年
『角川日本地名大辞典』 角川書店 一九九一年

〒一七五—〇〇九二

東京都板橋区赤塚三一—二八一三

TEL 〇三—三九三八—二七八九

『片玉集』の中の女の史料について

倉本京子

『片玉集』には、本誌十二号で取り上げた「藤井氏女記」が収められている。今回は、『片玉集』の中の女の史料を調査してみた。

『片玉集』は、秋田藩主佐竹家の御用達商人津村涼庵正恭(一七三六—一八〇六)が平安期から江戸期までの約千点の和文学を収録したものである。自筆の前集百巻・後集百巻・続集四十六巻の計二百四十六巻は宮内庁書陵部に所蔵されている。別に大田南畝編の『三十幅』に抄録が収められていて、国会図書館に所蔵されている。その中に、四十六名の江戸期の女性の手になる百六点の作品を見い出すことができる。

前集 卷六十三

〈丹羽長寛室女文〉

陸奥二本松十萬石藩主の丹羽長寛室が、娘が菅谷兵庫へ嫁ぐ時に書き与えたもの。

〈身延紀行〉 邦 佐竹義峯室女

『片玉集』続集卷四十一の「佐竹家譜」によれば、邦は享保十四年(一七二九)十二月十五日生まれ。名

は猶子。佐竹家は秋田藩二十万石。宝暦元年(一七五二)に佐竹義明に嫁ぐ。

本紀行は、寛政元年(一七八九)七月二日出発。約一カ月の行程。江ノ島へ寄り、箱根の関を越え、富士川を渡り、身延山久遠寺への参詣。

〈たのしみ〉〈年賀序〉〈浚明院公方様御悼の文〉

よし 越前守重富室

浚明院は、十代將軍徳川家治。

〈江嶋鎌倉日記〉 尼妙臨 伊藤氏

寛政十二年(一八〇〇)四月出発。

〈はこね路日記〉 尼妙臨 伊藤氏

享和元年(一八〇二)四月出発。

〈きね川のこと葉〉〈巢鴨の記〉〈高とのゝ記〉〈秋の野にあそふことは〉〈山家の雪〉〈ほたる〉よし女

〈花見記〉 さち 石川雅望女

石川雅望は狂歌四天王の一人。狂号は宿屋飯盛。雅望は、正恭の友人。

前集 卷六十四

〈藤井氏女記〉『江戸期おんな考』十二号に翻刻。

〈文月の記〉 羽鳥一紅

天明三年(一七八三)七月の浅間山の噴火の記録。高崎の人で、涼袋門の俳女。この時六十歳。